

保育者養成校における表現活動 —自己紹介を題材とした授業実践—

加藤 友彦*・長島 佳奈*

2023年12月1日受理

1. はじめに

1-1 保育者養成校の表現活動

保育者養成校では様々な表現活動が行われている。子どもの表現をささえるための活動もあれば、保育者としての表現技術を身につける活動もある。大阪健康福祉短期大学保育・幼児教育学科（以下、本学科とする）では、ペープサート劇、指人形劇、紙芝居の製作と発表を通して表現技術の習得を図ってきた。その中で常に課題となっていることがある。学生は、豊富なアイデアを持ち、絵人形や紙芝居絵を熱心に製作する。描いたりつくったりすることを得意とする学生は少数であるものの、製作活動に入ると質の高い表現を目指し、製作物の完成度は高く、出来栄に学生は満足する。その一方で、発表となると他者を意識した発声や演技力の課題が明らかになる。この課題を解決する方法として、2022年度から、授業科目「表現技術Ⅰ」ではアイテムを用いた自己紹介に取り組んできた。本稿は、2023年度に実施した「表現技術Ⅰ」の授業実践について述べ、その学習効果と課題について報告するものである。

1-2 先行研究

寺島（2007）は、保育者養成校（短期大学）の学生が保育実習で自己紹介をするときに用いる教材に着目し、実習時の不安感と実習に用いる教材の関係について調査した。その結果、既製品を用いるよりも学生が手づくり教材を準備することで、実習の不安が少し緩和されることを明らかにした¹⁾。

続いて、寺島（2008）は、保育者養成校の保育実習指導で、自己紹介に用いる教材の製作を実践し、どのような教材であれば学生には製作しやすいかを調査した。その結果、自己紹介の製作で最も多かった教材は

ペープサートであり、その理由として、学生自身で製作材料を容易に準備できること、教員の提示した参考作品に学生が魅力を感じたことがあげられた²⁾。

寺島の研究では、学生が教材を自作することの意義が明らかとなっている。

1-3 題材設定

授業科目「表現技術Ⅰ」は、自己紹介のアイテム製作と発表を通して習得した表現技術を、本学科で4回実施する実習（保育実習3回と教育実習1回）の中で活用することを想定した。題材設定については、以下の通りとした。

- ①子どもの前で自己紹介することを想定して、シナリオを作成した上でアイテムを製作する。
- ②アイテムは子どもの発達や特性に留意して、モチーフ、大きさ、色、形などの造形要素を工夫する。特に、まだ文字の読めない子どものいることを考慮して、文字要素は使わないこととする。また、製作に必要な材料は各自で用意する。
- ③子どもの注意を引きつけ効果的な自己紹介となるように、声を中心とした音声表現や、身振り手振りなどの身体表現も工夫する。
- ④受講生全員の前でアイテムを用いて自己紹介の発表をする。発表時間は3分程度とする。発表後には自他の発表の振り返りをする。

1-4 研究方法

2023年度の授業を通して、構想から製作までの学生の様子、製作物、アイテムを用いた発表、発表後も鑑賞と授業後に実施したワークシートの記述から学習活動の妥当性を考察する。

*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

2. 授業実践

2-1 授業の概要

科目名 「表現技術Ⅰ」
期間、回数 2023年6月～8月、全8回
活動場所 第1講義室、演習室、多目的室
担当教員 保育・幼児教育学科の専任教員6人。このうち筆者・加藤は授業全体を統括し、アイテム製作の指導・援助を担当した。筆者・長島は発表の指導・援助をした。
受講学生 45人 ※科目履修時

2-2 表現活動

2-2-1 学習課題の把握（第1回）

講義の概要を聞き、学習の流れを把握したあと、教員によるアイテムを用いた自己紹介の実演を見た。

続いて、参考作品として、前年度の受講生の製作したアイテムを見た（PPの画像による）。次に、PCを用いてインターネットで様々な自己紹介の方法を調べ、ワークシートに記述し、記録した。

2-2-2 発表シナリオと表現の構想（第2回）

前回、調べたことをもとに、自己紹介のアイテムを決定し、アイテムと連動した自己紹介の方法（シナリオ）の構想を練った。アイテムはアイデアスケッチを描いた。シナリオとアイデアスケッチはともに教員に提出し、添削を受けた。

2-2-3 製作（第3回～第5回）

3回連続する製作活動の流れを把握し、各自で準備した材料と用具を用いて、アイテムの製作をした。

2-2-4 発表の練習（第6回）

学内2カ所（第1講義室と多目的室）に分かれて発表の練習をした。授業の前後半で教室を変え、発表場所である多目的室では本番の舞台上で練習をした。練習はゼミごとに行い、ひとりずつ他のゼミ生の前で演じ、発表者以外は感想や改善点を伝えた。

2-2-5 発表（第7回）

発表の流れ把握した後、学籍番号順に発表をした（発表の様子は教員が録画した）。発表者以外は鑑賞し、子ども（幼児）になったつもりで、発表者の問いかけなどに応じた。

2-2-6 鑑賞と学習のまとめ（第8回）

録画した発表の動画を鑑賞した。発表に対しての教員のコメントを聞き、ワークシートに鑑賞文と学習の振り返りを記述した。

2-3 授業アンケート

第8回授業後にアンケート調査をした。構想、製作、発表の各段階で、教員の事例紹介、事例研究に活用したものや人、選んだアイテム、テーマやモチーフの工夫（以上構想）、製作時間、用意した材料や用具、製作で工夫したこと（以上製作）、発表の練習、発表までの自主的な練習、自分の発表、他者の発表（以上発表）の11項目で選択肢と記述による回答を求めた。

第8回授業に出席した受講生全員に用紙を配布し、アンケート回収率は100%であった。N=40

3. アイテムの構想と製作

3-1 構想と製作の様子

第1回の授業では、4人の教員が実演を通して事例紹介を行った。紹介したアイテムは、パネルシアター、パペット（ソックス・パペット、牛乳パック人形、ハンド・パペット）、ペープサート、指人形、スケッチブックシアターの7種類であった。このうち、パネルシアターを用いた実演では替え歌による演出の工夫があり、指人形を用いた実演はクイズ形式による演出の工夫があった。学生は、どのアイテム紹介も興味深く受け止めていた。アイテムを用いた効果的な演出に着目している様子があった。

教員の事例紹介後に、PCあるいはスマートフォンを用いて、各自で事例研究を行い、第2回の授業では、自己紹介に用いるアイテムを決定し、自己紹介の演出方法を考えた。

3-1-1 教員の事例紹介

構想にあたり、第1回で実施した教員の事例紹介の可否について、4つの選択肢から回答を求めた。「とても役に立った」は24人（60%）、「役に立った」は16人（40%）、「あまり役に立たなかった」と「役に立たなかった」はともに0人（0%）であった。「とても役に立った」「役に立った」を合わせて100%となり、教員の事例紹介は有効であった。

3-1-2 情報収集に活用したものや人

第1回と第2回で実施した事例研究について、6つの選択肢から回答を求めた（複数回答可）。最も多かったのは「スマートフォン」の38人（95%）、次いで「PC」の24人（60%）、「教員」の7人（17.5%）、「友人・家族」の2人（5%）であり、「書籍」と「その他」は0人（0%）であった。学生にとっては、インターネットが主な情報源であった。

3-2 製作の様子

第3回から第5回の授業で製作を行った。学内2カ所で行い、多くの学生はほとんどの授業が行われ、日常的な居場所でもある第1講義室で活動をした。学生はいくつかのグループに分かれ、互いのアイデアや表現を認め合い、進捗状況を確認しながら製作を進めていった。学生同士の教え合いや、教員の助言もあり、順調な活動であった。一方、主に造形表現活動で使用する演習室は、多数の用具が揃ってはいるものの、学生には馴染みのない場所であるため、特定の学生が使用するだけであった。

第5回終了時で、多くの学生はアイテムを完成させ

た。完成しなかった数人の学生は持ち帰って製作した。

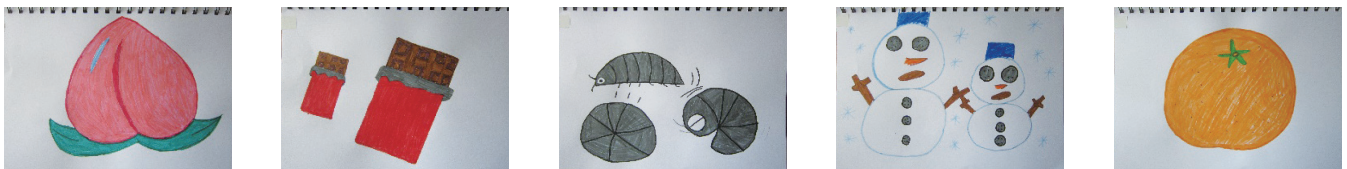
3-3 選んだアイテム

選んだアイテムについて記述で回答を求めた。分類不能のアイテムを除き、アイテムは10種類であった。最も多かったのはスケッチブックシアターの16人（40%）、次いでパペットの8人（20%）、ペープサートの7人（17.5%）、マジックシアターの2人（5%）であった。その他は6人（15%）であった。その他のアイテムにはミラクルレンジ、マジックキューブ、パネルシアター、ポップアップカードがあり、それぞれ1人ずつで、分類不能のアイテムは2人（5%）であった。

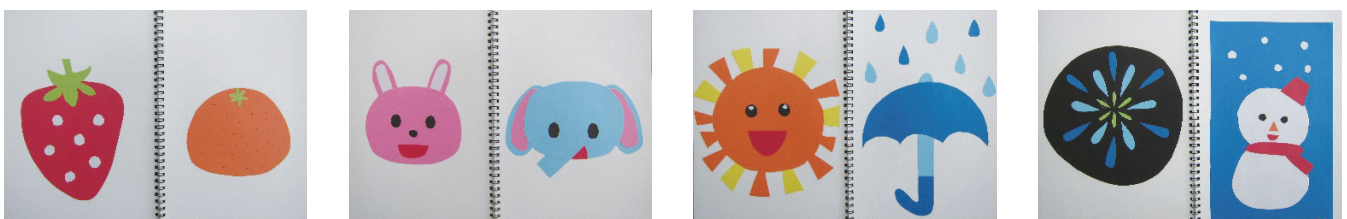
3-4 アイテムの分類

3-4-1 スケッチブックシアター

16人の学生が選択したスケッチブックシアターは、比較的容易に製作でき、インターネットで検索すると、多数の事例を見つけることができるアイテムである。そのうち10人は描画で表現し、6人は色画用紙などを用いて貼り絵で表現した。〈図1〉〈図2〉



〈図1〉スケッチブックシアター／描画の表現



〈図2〉スケッチブックシアター／貼り絵の表現

3-4-2 パペット

8人の学生が選択したパペットはハンド・パペット、フィンガー・パペット、ソックス・パペット、紙コップ・パペットなど様々な種類がある。手にはめたり持ったりして演じるアイテムで、スケッチブックシ

アターよりも演技の自由度は高い。パペットによってはパクパクと口が動き、話しているように演じることができる。ハンド・パペットと牛乳パック人形（紙パペットの1種）はともに3人、手袋パペットと紙コップ・パペットはともに1人であった。〈図3〉



〈図3〉パペット／ハンド・パペット、牛乳パック人形、手袋パペット、紙コップ・パペット

3-4-3 ペープサート

7名の学生が選択したペープサートは、保育の中ではよく用いられるアイテムのひとつである。絵人形の

表裏両面を活かした表現の工夫ができる。手に持ち動かすことができ、パペット同様、演じることに適している。〈図4〉

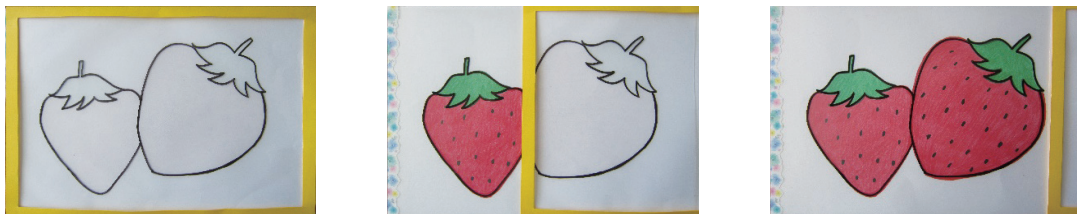


〈図4〉ペープサート／表面（左）、裏面（右）

3-4-4 マジックシアター

2名の学生が選択したマジックシアターは、スケッ

チブックシアターの一種とも考えられる。単純な仕掛けで画面が変化するアイテムである。〈図5〉

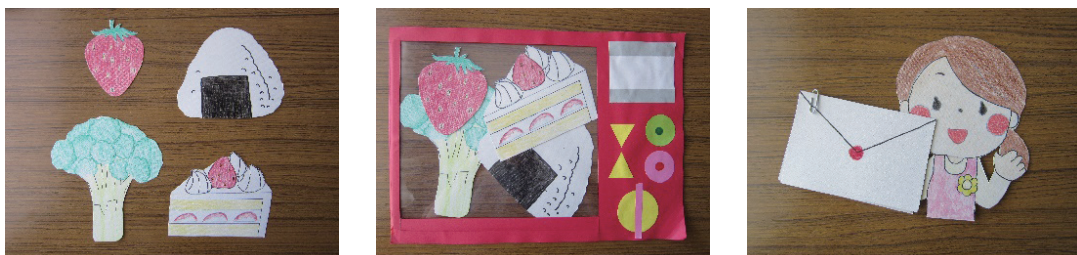


〈図5〉マジックシアター

3-4-5 その他のアイテム

それぞれ1人ずつの学生が選択したミラクルレンジ、マジックキューブ、パネルシアター、ポップアップカードは、パネルシアターを除き、比較的安価に材

料を入手できるが、加工に手間がかかるアイテムである。仕掛けがあり、視覚的な工夫のあるところが共通している。〈図6〉



〈図6〉ミラクルレンジ

3-5 テーマやモチーフの工夫

構想段階でのテーマやモチーフの工夫について記述で回答を求めた。多岐にわたるテーマやモチーフの工夫は「シナリオ（演出）に応じたモチーフの工夫」、「子どもにとってわかりやすいモチーフの工夫」、「色、大きさ、描き方など造形的な工夫」の3つに分類することができた。最も多かったのは「シナリオ（演出）に応じたモチーフの工夫と」の16人（42.1%）であった。次いで「子どもにとってわかりやすいモチーフの選択」の15人（39.5%）、「色、大きさ、描き方など造形的な工夫」の11人（28.9%）であった。

3-6 製作時間

製作時間について、4つの選択肢から回答を求めた。「とても十分だった」は3人（7.5%）、「十分だった」は24人（60%）、「やや足りなかった」は11人（27.5%）、「足りなかった」は2人（5%）であった。「とても十分だった」と「十分だった」を合わせた、およそ7割の学生は、製作時間は妥当と判断した一方で、およそ3割の学生は、もっと製作時間が必要と回答した。

製作時間が足りないと回答した学生の製作したアイテムは、パペットが4人、スケッチブックシアターが3人、ペープサートが2人、マジックシアターが1人、ポップアップカードが1人、パネルシアターが1人であった。パペット、マジックシアター、ポップアップカード、パネルシアターは、どれも製作に時間のかかるアイテムである。一方、比較的容易に製作できるスケッチブックシアターは、絵を描いたり紙を貼ったりする以外に仕掛けを施したものだと推測する。また、ペープサートは個数の多さから時間がかかった可能性が考えられる。

3-7 アイテム製作に用いた材料と用具

3-7-1 紙類

製作に用意した材料や用具について記述で回答を求めた。アイテム製作の材料で最も多かったのは紙類の36人（90%）であった。紙類をさらに分類すると、スケッチブックの16人（44.4%）が最も多く、次いで色画用紙の11人（30.6%）、画用紙の9人（25%）であった。他に色紙、厚紙、牛乳パック、新聞紙、紙コップ、段ボール、Pペーパーがあった。

3-7-2 紙類以外の材料

紙類以外の材料を用いたのは20人（50%）であった。最も多かったのは割りばしの7人（35%）、次いでフェルトの5人（25%）、糸（刺繍糸を含む）の4人（20%）であった。他にマスキングテープ、マジックテープ、磁石、クリアファイル、プラスチック・ケース、ブックスタンド、不織布、発泡スチロール板、ビニールテープ、マドラー、鈴があった。

3-7-3 描画材料、用具

描画材料を用いたのは25人（62.5%）であった。最も多かったのは、マーカーと色鉛筆のともに12人（48%）、そのうち、併用していたのは5人（20%）であった。他にポスカ、クーピー、クレヨンがあった。

用具で最も多かったのはハサミの6人（40%）、次いで裁縫用具の4人（26.7%）であった。他に、カッターナイフがあった。接着の材料で最も多かったのは、粘着テープの7人（46.7%）、次いで接着剤の5人（33.3%）であった。他に両面テープがあった。

3-7-4 アイテム製作に用いた材料と用具のまとめ

アイテム製作に用いた材料は、加工に特別な技術が必要としない紙類が多く、紙類以外の材料は身近なところで入手しやすく、安価なものであったり、新たに購入しなくても日常生活の中で手に入ったりするものであった。描画材料と用具も同様で、どれも大学入学前に使い慣れたものであった。

3-8 表現の工夫

表現の工夫について記述で回答を求めた。表現の工夫は色、形、大きさ、わかりやすさ、仕掛けの5つに分類することができた。表現の工夫の中で最も多かったのは色の15人（37.5%）であった。次いでわかりやすさの11人（27.5%）、仕掛けと大きさのともに8人（20%）、形の4人（10%）であった。

3-9 構想と製作のまとめ

構想段階での事例紹介は、教員の実演によって明確に学習課題が伝わったと考える。インターネット上の動画視聴によっても事例の紹介はできるが、同じ空間で人が演じることで生まれる臨場感は異なる。教員の実演を経ることで、その後のアイテム選択につながった。

分類不能のものを除き、10種類のアイテムが製作された。自己紹介の対象となる子どもにはどのように伝えたらよいのか、何をモチーフとすれば伝わるのか、この2つを意識した上で、製作技術、製作時間、材料費を加味してアイテムを選択していた。スケッチブックシアター、パペット、ペープサートの3種類で全体の4分の3を占めた中、1人の学生しか選択しなかったアイテムがあった。どれも、製作に時間のかかるものであった。そのようなアイテムを選んだ、意欲の高い学生のいたことを評価したい。限られた時間での製作活動のため、意欲の高さがアイテムの完成度には結び付かない例もあったが、表現の多様性を反映することにつながった。

半数近い学生の選択したスケッチブックシアターは、視覚的なわかりやすさや、手芸などの製作技術が不要であることが理由として考えられる。その一方で、モチーフの写実的表現と子どもにとってのわかりやすさは異なることへの理解が欠如している例もあった。また、モチーフの色合いの配慮に欠ける例もあり、彩度の高い配色としたり、必要に応じて輪郭線を施したりする必要があった。

全体としては、学生個々の意欲や能力に応じて、製作することができたと評価する。

4. アイテムを用いた発表

4-1 発表の様子

第7回目の授業では受講者それぞれが、自己紹介アイテムを使って全員の前で発表を行った。発表者は保育者役として実践し、それ以外の学生は子ども役として参加し発表を鑑賞した。教員は学生に、発表者の求めに応じて積極的に参加することを求めた。なお、発表は学生自身が自分の発表を観て振り返りができるように、動画撮影をした。

学生は入学して4カ月経ち、それぞれに親しい友人関係が生まれ、同一学年としての一体感も生じる一方、同級生の前で発表する機会は少なく、緊張感をもって発表に臨んでいた。発表者から子ども役の学生に問いかけがあると、子どもになりきって積極的に参加していた。

4-2 発表の評価

発表の評価は、態度、表現、演出の3項目で行った。それぞれ、「大変よい」、「よい」、「普通」、「努力を要する」、「非常に努力を要する」の5段階で評価した。評価の観点は〈表1〉の通りである。

〈表1〉評価の観点

項目	態度	表現	演出
評価の観点	発表の前後に適切なあいさつ等を行い、自信と熱意を持ち、積極的な態度で発表している。	子どもの理解しやすい言葉を用い、十分な声の大きさと適切なスピードで、抑揚をつけて話し、表情、身振り・手振りなど非言語的な要素を意識して表現している。	視覚的配慮にもとづいてアイテムを見せ、子どもにとって身近なテーマや興味を引く内容で、参加型にするなどして、効果的に見せる工夫をしている。

4-2-1 態度の評価

態度の評価について述べる。「大変よい」は33人(84.6%)、「よい」は5人(12.8%)、「普通」は1人(2.6%)、「努力を要する」と「非常に努力を要する」はともに0人(0%)であった。

学生によっては、発表に不安を感じていたり、人前で発表することに苦手意識を持っていたりしたが、全体としては積極的な姿勢で発表できていた。特に、8割を超える学生が「大変よい」の評価となったことは、学習に対する真剣な姿勢の表れと考える。

4-2-2 表現の評価

表現の評価について述べる。「大変よい」は12人(30.8%)、「よい」は10人(25.6%)、「普通」は14人(35.9%)、「努力を要する」は3人(7.7%)、「非常に努力を要する」は0人(0%)であった。

事前にシナリオを用意し、発表前に練習の時間を1コマ設けた。ゼミに分かれてお互いの発表を披露しフィードバックを得ることで、学生は準備を整えて発表に臨むことができた。「大変よい」と「よい」の評価となった学生が半数以上(22人、56.4%)であった。

ことは、発表に対する学生の意識の高さが反映されていると考える。アイテムの完成度の高さや造形的な工夫も必要であるが、アイテムをどのように用いて自己紹介をすれば相手に「伝わる」のかを、表現の課題としてとらえていた。

4-2-3 演出の評価

演出の評価について述べる。「大変よい」は11人(28.2%)、「よい」は12人(30.8%)、「普通」は12人(30.8%)、「努力を要する」は3人(7.7%)、「非常に努力を要する」は0人(0%)であった。

学生は、アイテムを効果的に活用し、練りこまれた演出で自己紹介を行っていた。製作したアイテムの種類は限られていたが、同種のアイテムでも、演出によって伝わり方は異なっていた。次項でアイテムの特性を活かした、効果的な演出について述べる。

4-3 効果的な演出

4-3-1 ペープサートを用いた演出

学生Aはペープサートを用いて自己紹介を行った。ペープサートの表裏両面を用いて、自分の飼っている生き物や、好きな花などをシルエットクイズにし、子ども役の学生と対話をしながら自己紹介を進めていた。そして、自己紹介に終わらず、子ども役の学生に「あなたのお名前を教えてください」と問いかけ、コミュニケーションをとる工夫をしていた。

4-3-2 パペットを用いた演出

学生Bは自己紹介の際に、カラフルな手作りパペットを活用していた。このパペットは学生Cの友だちとして設定され、自分の好きなものや食べ物をその友だちに持たせるというストーリーで自己紹介を進めた。パペットが好きなものや食べ物で華やかに彩られる様子に、子ども役の学生からは「可愛い」などと声が上がっていた。他にもパペットを活用する学生はいたが、パペットと対話して自己紹介を進める演出は効果的であった。

4-3-3 ポップアップカードを用いた演出

学生Cは、ポップアップカードを活用して自分の名前の頭文字を当てるクイズをしながら発表した。各ページの絵が飛び出すようになっており、「わ」の「わなげ」のページでは、実際に小さな輪投げで遊べ

るようにしていた。ページごとに工夫を凝らし、ポップアップの仕掛けを効果的に用いた演出をしていた。多くの学生は「わたしの名前の一文字目は○です」と、言葉と絵のみで伝えることが多かったが、立体的に表現し遊びの要素を取り入れることで、見るものは楽しみながら名前を知ることができていた。

4-3-4 パネルシアターを用いた演出

学生Dは、パネルシアターを活用して自分の好きなものや興味のあるものを紹介した。最初に自分の顔を描いた絵人形をパネル板に貼り、「私は、ぱっちりお目目と長い髪が特徴です」と自分の目を指さしたり、髪を撫でたりする身振りを入れていた。次に、絵人形の一部を見せながら好きな食べ物や花のヒントを出し、子ども役の学生と応答できるよう工夫をしていた。さらに、それぞれの絵人形をパネルに貼る前に、腕をのばして絵人形を高い位置に持っていく「私は○○が好きです」とアピールをしていた。

4-4 発表の課題

4-4-1 声の出し方や話すスピード

学生は懸命に大きな声を出しており、他者に伝えようとする姿勢が見られた。しかし、声の抑揚に欠ける傾向にあった。発表の最初から最後まで同じ音量で話すのではなく、時には声を小さくしたり声のニュアンスを変えたりするなどして、子どもの関心を引くなどの工夫も必要であった。また、話すスピードは、緊張のためかやや速くなる傾向にあった。強調したい部分はゆっくり話したり、子ども役の反応も見ながら適切に間を入れたりして、内容をより分かりやすく伝えることを意識して取り組むことが求められる。

4-4-2 表情や視線

多くの学生は発表中に自然な笑顔を見せており、適切なタイミングで子ども役と目を合わせることができていた。前列の観客に対しては、クイズなどの参加型にすることによって視線を合わせながら対話をして興味を引きつけていた。しかし、特に後列の観客に対しては、視線が行き届かず、子ども役の学生の関心が薄れていたようであった。クイズなどの参加型の発表をする際は、全ての観客に対して均等な配慮をする必要がある。また、表情豊かな発表者の方が観客の興味関心を引きつけていたため、表情の使い方を意識した練

習を積み重ねることが求められる。

4-4-3 身振り・手振り

多くの学生の身振り・手振りは小さかった。クイズを出す際に、指を「いち」「に」と動かしながら「1問目は…」「2問目は…」などと表現する発表者が多かった。しかし、指や腕の動きが小さかったため、発表者と子ども役の学生の相互作用を十分に促すことはできていなかった。自分の伝えたいポイントや内容に合った身振り・手振りや言葉を考えたうえで、鏡の前などで何度も練習したり、他者からのフィードバックを受けたりして、手の動きやジェスチャーなどを確認することが求められる。

5. 鑑賞と学習の振り返り

5-1 学習の様子

発表後に、撮影した動画を観て鑑賞を行った。学生は、他者の発表を一度は観ているものの、興味深く見ている。一方、自分自身の発表となると、恥ずかしさもあり正視できない学生もいた。その後、鑑賞文と学習の振り返りをワークシートに記述した。

5-2 学生の記述から

ワークシートの記述は、鑑賞は「自分の表現を通して感じたこと、気づいたこと、考えたこと」と「他者の表現を通して感じたこと、気づいたこと、考えたこと」の2項目、学習の振り返りは、「学習を通して感じたこと、気づいたこと、考えたこと」の1項目とした。

以下に学生の記述を記す。同様の回答の場合はより具体的なものを選び、できる限り学生の言葉を記している。誤字脱字と不正確な文章表現のみ筆者が訂正している。

5-2-1 自分の表現を通して感じたこと、気づいたこと、考えたことについて

【声の大きさの記述】

- ・大きな声を出していたつもりだったが、思ったよりも小さかったので、自分が思っている以上に大きく話すように心がけるとよいと思った。
- ・自分が思っているよりも、大きな声と豊かな表情で話さないと、子どもたちには伝わりにくい

と思った。

- ・緊張すると話すスピードが速くなったり、声が小さくなったりしてしまうことが分かったので、今後意識していけたらよりよい発表になると思った。
- ・声を大きくすることで後ろの人にも聞こえやすくなるが、強弱をつけることも一つのポイントだと思った。

【演技方の記述】

- ・笑顔で演じることができたし、周りの反応に応えることができた。
- ・映像で見ると、マスクをしていても、すごく笑っていると笑顔であることが分かった。
- ・自分が楽しみながら演じると、聞き手も楽しくしてくれると感じた。

【アイテムの記述】

- ・原色のほうが見やすかったと気づいた。
- ・絵が薄くて見えにくかったので、線をもっと濃くすればよかったと気づくことができた。
- ・絵は後ろまでしっかり見えていたので、輪郭を色ペンで描くという工夫ができていてよかった。
- ・シルエットを見せた時に、見えにくそうにしていた人もいたので、もう少し大きく作れば良かったと気づいた。

【演出の記述】

- ・オノマトペを多く取り入れると良いと思った。
- ・クイズを出して、違う答えが出てきたときの声掛けが難しかった。
- ・子どもの答えを聞きながら共感的に話すことが大切であると分かった。

5-2-2 他者の表現から感じたこと、気づいたこと、考えたことについて

【声の大きさや演技方の記述】

- ・声に強弱をつけて、みんながクイズに集中できるように工夫していた。
- ・キャラクターを出すとき、声のトーンを上げていた。
- ・ゆっくりとハキハキ話している人の方が聞き取りやすく、注目も浴びやすいと思った。
- ・「トントントン だれですか？」などみんなと一緒に言う掛け声があつてよかった。

- ・子どもたちの反応を見て「そうだね」などと言葉かけをすることで、嬉しくなると感じた。
- ・アイテムが見えやすいように上に高く上げたり、周りをよく見たりして話していたよかった。
- ・アイテムを徐々に見せることで、子どもの興味を引くことができ、「何だろう」と問いかけることで、より子どもの反応を得ることができるので良いと感じた。
- ・子どもと目を合わせることや、見えにくい子どもがいたら近づいて見せることも大切だと学んだ。
- ・スケッチブックをめくる際には、スムーズにめくられるように工夫が必要だと感じた。

【アイテムについての記述】

- ・絵が大きくて線が太いほうが見えやすいことが分かった。
- ・音の鳴るもので子どもたちの興味を引いたり、皆に見えやすいよう大きく描いたりするなどの工夫がされていてよかった。
- ・フェルトを使ったり、紙コップや牛乳パックを使ったり、様々な工夫やアイデアがあった。
- ・それぞれ色々な工夫がされていて参考にしたいものが多くあった。

【演出の記述】

- ・好きなものをクイズにしたり、名前に関するクイズを出したりすることで、分かりやすくみんなが楽しめる自己紹介になると感じた。
- ・人によってクイズが違ってとても面白いと思った。

5-2-3 「表現技術Ⅰ」の学習を通して感じたこと、気づいたこと、考えたことについて

- ・全体の発表や振り返り、フィードバックを通して、自分に足りなかった表現方法や、やっていたよかった表現方法が分かった。
- ・他者の発表を見て、自分にはなかった表現を知ることができたのでとてもよかった。
- ・クラスの中で発表することや自分がした発表を自分で見ることは恥ずかしかったし、緊張したけど、今後の自分のスキルになると感じた。
- ・他者の発表を見て、新たな工夫やアイデアも学

ぶことができた。

- ・自己紹介の方法には、いろいろなやり方や工夫があることがわかった。
- ・声の強弱をつけたり、間をあけたりするなどして、話すときに工夫することが大切だと感じた。
- ・私は発表することが苦手なため、今回の授業はとても不安だったが、やってみると楽しかったし、人前で発表する力が身についたと感じている。
- ・子どもたちの反応に臨機応変に対応できるようにポイントをおさえて発表したところ、思っていた以上にスムーズに発表することができた。
- ・立案、製作、発表まですべて自分で行ったため、非常にやりがいのある活動ができた。
- ・どのような言葉を使うと伝わりやすいのか、どんな色や形にすれば興味を持ってもらえるかなど、考えることも多く大変だったが、出来上がった時の達成感は大きく、やりがいを感じることができた。
- ・製作をするにあたり、どんなシナリオでいくか、子どもたちの反応にどう対応していくかを考えることが難しかった。
- ・鑑賞することで、どのような自己紹介があるか、他者がどのように子どもたちと接しているか見て学ぶことができた。
- ・実習の際に、今回行った自己紹介を活かして取り組みたい。
- ・子どもはどのようなものが好きなのか、どのようなことを楽しんでもくれるのかを考え、それをもとに実際に製作することがとても難しかった。
- ・他者の発表や自分の発表を比べて、違いに気づくことができてよかった。
- ・自分が想像していたよりも、上手にできて自信が付いた。この経験を大切に表現する力を高めたい。
- ・みんなの前で発表することで、自信にもつながったので、発表するということは良いことだと気づいた。
- ・保育者自身が楽しみ、明るく振る舞うことで、子どもたちにもより伝わるんだと感じた。

5-3 学生の記述のまとめ

他者の前で発表する中で実感したことや、映像で自分の姿を客観的に観ることで気づいたことの記述が多く見られた。自分の声の大きさやスピード、表情の使い方、アイテムの色や大きさなど、発表の方法に関すること、また、子どもたちが答えたときの応答の仕方についての記述があり、映像を観て振り返ることは自分の発表の強みや弱みを見つけることに役立ったといえる。鑑賞は実際に動画で客観的に自分たちの姿を見ることで、他者からどのように見られているのか、伝えたいことが伝わっているかを再認識する場となった。そして、他者の発表からも、声の使い方や話すスピード、目線や表情の使い方にも意識を向けることや、子どもたちの反応に共感しながら言葉かけをすることの重要性に気づくことができた。

課題を把握し、シナリオを作成し、アイテムを製作し、発表し、鑑賞と振り返りをする一連の学習を通して、それぞれの学生に学びがあった。個人の学習から始まり、製作と発表を通して他者の表現に触れることで学びの共有となった。初めて取り組むことも多く、また発表に不安を感じていた学生もいたが、発表の中で声援を受け、発表後に拍手をもらうことで自信につながった。保育者を目指す学生として、子ども理解をふまえた表現活動を展開することで、深い学びとなったと考える。

6. まとめ

6-1 総括

授業科目「表現技術Ⅰ」では、アイテムを用いた自己紹介を題材として取り組み、アイテム製作と発表を通して、表現技術を習得することができた。受講した学生の多くはデジタル・ネイティブ世代である。「もの」を通しての表現活動の経験は少ないことが予想された。また、他者との直接的なコミュニケーションを苦手とする様子があり、特定の友人とだけ話す姿も見られた。そのような学生に対し、描いたりつくったりする活動と、人前で発表をする活動は有効であったと考える。

表現活動の前半であるアイテム製作は、一端つくり始めると、よりよい表現を目指して熱心に活動をした。目的意識が明確で、「子どもの興味・関心に応じて」という条件はあるものの、学生に選択の自由があったことが理由と推察する。また、モチーフは、図

画工作科や美術科の授業ではおそらく認められないが、学生自身がよい（カワイイ）と考える表象となっていた。選択の自由と価値観の一致によって製作活動が活性化したと考える。

表現活動の後半である発表は、たった1人で受講生全員の前で行うことから、不安を感じていた学生は多くいたようだ。事前にシナリオを作成し、発表前に練習の時間を設けた。練習はゼミ単位の小グループで行い、フィードバックを得ることで、不安の解消につながることを期待した。実際の発表では緊張感もあり、思い通りの発表とはならなかった学生もいたが、それぞれが精一杯の表現をした。子ども役の学生は、1人で発表する学生の心情を察して協力的な参加をし、発表自体が貴重な学習経験となり、協同的な学びになったと考える。

発表後の鑑賞と学習の振り返りを通して学びはさらに深まった。まず、自分の表現を客観的に見ることで、自分自身の課題が明らかとなった。さらに、他者の発表から自分にはなかった表現を知ることとなった。同じ種類のアイテムを用いても、演出によって伝わり方の違いがあることが分かった。学生は、学習の最終段階で振り返りをするこの大切さに気づいたと考える。

6-2 残された課題

今回の授業実践を通して、いくつかの課題が明らかとなった。まず、アイテム製作については、入学後に、改めて造形の基礎技能を学ぶ機会のなかったことが課題と考える。教員の実演やインターネットを通して、様々なアイテムを知り、それぞれに魅力を感じるだろうが、表現力に不安があると製作を断念する可能性がある。アイテムをつくりたい思いがあっても、表現力や加工の技能をともなわなければ、選ぶアイテムの数は限られる。中学校卒業以来、描くことやつくることから離れている学生にも配慮して、造形について学ぶ機会が必要であった。

次に、選択したアイテムによって、製作時間に差が出たことが課題と考える。製作時間が足りなかったと回答した学生の製作したアイテムは、やはり製作に時間のかかるアイテムが多かった。時間数を増やす、時間数を増やすことができないのであれば授業の間隔をあけるなどして、製作時間を確保することが求められる。

また、発表の課題は前述の通りである。他者に対してどのようにすれば「伝わる」のかを意識することが大切である。

そして、実習時の活用について検証することができなかったことが課題と考える。実習での活用を想定した活動であるため、実習の中でアイテムを用いた自己紹介をすることができたのか、できたのであれば子どもはどのような反応を示したのか、保育現場の保育者からはどのような評価があったのかなどを知る必要があった。

以上のような課題の解決に向けて、授業改善を図っていきたい。

6-3 謝辞等

「表現技術Ⅰ」の授業に際し、主にシナリオ作成でご指導いただいた本学科専任教員と、アイテム作品掲載に快く応じた10名の学生に、この場を借りて謝意を述べる。ありがとうございました。

参考文献・引用文献

- 1) 寺島明子 (2007)「保育実習(Ⅱ)の自己紹介の仕方—学生の準備した手づくり教材について考える—」『松本短期大学紀要』16巻 165-182
- 2) 寺島明子 (2008)「保育実習での自己紹介の仕方 その2—学生の準備した手づくり教材について考える—」『松本短期大学紀要』17巻 69-78